

【コンペティションI 総評】

第31回となる今回は、昨年比約4割増の応募167組から8組が第一次審査を通過し、本選で7組が上演した（1組が辞退）。

審査員賞を受賞したジャーニィとウェイディのデュオは、人間と自然の交感を拡がりのあるダンスにした。中国伝統舞踊で培った柔軟かつ精密な身体性、余白が観客の想像力を刺激する美術によって伝統と現代を巧みに融合した。ライ・ホン・ジョンはキャリアにふさわしい、完成度の高いデュオを披露。収縮する檻状のオブジェを使い2人の関係性を表現したグオ・タン、大きなベニヤ板を様々な道具に見立てて物語を綴ったイム・ジファンを含め、国外組はコンセプトも振付も洗練されていた。他方、国内参加の3組の率直さは、今後の展開を期待させるものだった。若手振付家のための在日フランス大使館・ダンスリフレクションズ by ヴァンクリーフ&アーペル賞の阿部真理亜は3x3バスケットボールから発想し、9人を振り付けて競技者の複雑な内面を多彩なムーブメントで見せた。神田初音ファレルは、世界の現状を直視し傷ついた魂を驚くほど直截に舞台に載せた。宮悠介は古代日本の神話にオマージュを捧げ、大らかなユーモアと共にダンスという行為を反復のサイクルに位置付けた。

コンペティションである以上、作品の完成度は重視される。一方で、既存の美学に従属しない大胆さもYDCの魅力であることを再認識した開催だった。

岡見さえ（舞踊評論家、共立女子大学文芸学部教授）

審査に参加するようになって2回目となった2025年のコンペティションIでは、ダンサーたちそれぞれの力量が強く印象づけられました。ベストダンサー賞に選出したHUNG DANCEのライ・イ・フェイとチェンユー・チイは、一次審査のダンサーとは異なるメンバーでしたが、二人の高い身体性により、まるで別の作品をみているかのような変化が感じられ、ダンサーのスキルと同時にカンパニーの底力を見せつけるようでした。奨励賞の神田初音ファレルの作品は、断絶と矛盾に満ちた現在の世界と、彼自身のアンデンティティとが結びつき、強いメッセージを発するものでした。舞台上で使用する言語と台詞が観客へ与える印象は、多数を占める観客の中に共有される知識や思想的なバックグラウンドによって大きく変化するのですが、そこで求められるのは、直接的なメッセージ以上に、その先にある時代や地域を超えた普遍性があります。今後、さまざまなバックグラウンドの観客を前に作品を深化させていくことを期待しています。審査員賞となったワン・ジャーニィ&フォン・ウェイディは、高い山を登山する男女二人の様子を描いた作品で、見立ての手法を用いながら時にユーモラスな動きを交えつつ、飽きさせない構成が見事だったと思います。それと同時に、

山登りという行為や、「空気が薄い場所へ行く」というタイトルが意味するところには、社会生活の上での様々な連想や読み解きも可能になるものもあり、知的な遊びに満ちた作品としても興味深く受け止めました。

木村絵理子（弘前れんが倉庫美術館 館長）

カ梅ルーンのチャーリー・ミンティアが来日できなかったのは残念だが、中国、台湾、韓国からの参加作品はいずれも力があり、興味深いものばかりだった。映像審査の段階から中国のコンテンポラリーダンスの多様で勢いのある作品群に魅せられたが、審査員賞のワン・ジャーニィ＆フォン・ウェイディ『Into Thin Air』は、過去のスタイルや技法をしっかりと通過した上で、若々しい感性でそれらを軽やかに乗り越えていくとするところに強く惹かれた。これからどんな作品が生み出されるのか楽しみでならない。

同じく中国のグオ・タン『Consensus Gentium』は、可動式の装置とダンサーとが形作る造形的美しさとともに、ダンサー2人から生まれる詩情が印象深い。台湾のライ・ホンジョン『Push and Pull』は、すでにロッテルダムやハノーファーでも賞を獲得しており、衝撃的な身体の動きといい、構成といい、巧みで間然とするところがない。その振付を完璧に踊りこなしたダンサー2人はベストダンサー賞にふさわしい。韓国のイ・ジファン『私たちはベニヤ板の上で一日を過ごすことにした』は、ベニヤ板を使ってさまざまにイマジネーションを広げていく情景が楽しい。

若手振付家のための在日フランス大使館賞・ダンス リフレクションズ by ヴアン クリーフ&アーペル賞の阿部真理亜『Queen of Zoos』は、9人のダンサーを使った、激しく、スタイルッシュな踊りが目を惹いた。宮悠介『暁鶴-repetitions-』は、ダンスでは苦行として扱われることの多い繰り返しが快楽に反転する面白さ。現在の悲劇的な世界情勢に苦悩し、自らを鞭打つ神田初音ファレル『懲肉祭～希求消失夜想曲 Ver.～』は、舞踏などの多様な経験を経て彼が獲得した身体の強度に瞠目させられた。

浜野文雄（新書館「ダンスマガジン」編集委員）

ダンサーを見るのがつくづく好きだ。自分の中の暗室をくすぐられる。

一観客として、7組の振付家の作品をかぶりつきで観れたことは最高の眼福だった。審査する必要がなきやもっとサイコーなんだけど、審査するからこそ終わった後もじっと見つめている。

という訳で自分のことははるか棚に上げて書かなくては、書くのならば、書いてみろよと言い聞かせつつ感想を述べさせて頂きます。

「暁鶲-repetitions-」

繰り返しというのは、見る側にとっては何か意味を問うものではなく、感覚の変容を誘き寄せられるための手法なのかなと思う。

その点において二人の掛け合いは小気味よく、照明が暗くなても脳内再生されるほどには気持ちいい振付だった。それ以上でもそれ以下でもなかったのは、繰り返すことで繰り返せない何かを生もうとしていたのか？までは分からなかったから。説明するためのダンスのその先、を次回は見たいです。

「Push and Pull」

瞬きするのも躊躇われる程の緊張感で魅せ切ってくれた13分。床をコンパスのように滑る浮遊感ある振付と、一寸でもずれたら怪我をするであろうスリリングな駆け引きを完璧にこなすダンサーには感服しかない。やがてこの、首尾貫徹に振付られたものを観客として無邪気に堪能することに一寸の戸惑いを感じるのは後のこと。

「私たちはベニヤ板の上で一日を過ごすこととした」

日常に根ざした労働者としての身体を描こうとしている視点にグッと期待した。

ベニヤを色々なモノに見立てる面白さも、腰を落とした動きの脱力さも独自性があって良かった。あとは肝心の身体の声が「振り」から飛び越えて来てくれたなら、シーンごとの観ている体感が積み重なったと思う。

「Queen of Zoos」

この空間に9人という一見多すぎ？な印象で目が泳げども敢えての混雑なのかと、個々をじっくり見るのとは違う目線でもって一塊のうねりを見る醍醐味。時たま現れるソロはみなギラギラと強く個性豊かで、瞬間的な喜びはある。

そのダンスは何のための、誰に向かっての表出なのか、という作品との繋がりが感じられたらもっと乗れたかも。

「Consensus Gentium」

計算されたフレームとムーブメントが絶え間なく変わっていく様は次の予想が付かず見応えがあった。

ダンサーの置かれた環境含めて振付するという着眼点も面白い。

ただ、フレームを動かしているのはダンサー自身であるが故に主体と客体の立場が混ざってしまい、本質的に何を見せたいのかが薄まってしまった印象。

構造物とがっつり組んだダンスってあまり見ないので、その可能性については是非探究し続けて欲しいです。

「懺肉祭～希求消失夜想曲 Ver.～」

神田さんの声、倒れる身体の音を聞くと心の痛みが伝わってくる。それをまんま曝け出す生きにヒリヒリ痺れる。でも。でも。舞台上でそれを見せられると、観客である私は少し距離を感じてしまう。

なぜなら舞台という構造は作り物だから。仮初めの板に本当を載せることと、仮初めの板に載せたものを本当にすることとは違うことの気がする。

観客の想像力を起こすこと（そっちとこっちの間に双方向の関係を作ること）、その余地をどう作るのかというのは、実際の振付を作ることよりも難しくかつ重要なことなんじゃないかと思っている。

それはさておき、今これをやらないと気がすまない、という原動力を最も感じた作品でした。

「Into Thin Air」

二人の存在感も、盛りすぎない動きのチョイスも、音の選び方＆使い方も、全てがフレッシュな魅力に溢れてる。

シンプルな演出によって空間的にも時間的にも余白をうまく使っていて、結果ダンスそのものを見せてるというより、ダンスを案内として此処ではない場所を感じさせるというのが凄くいい。しかもそれを技でなく行なっている（ように見える）ところに先天的センスの良さを感じさせる二人。

最後のオマケ

映像審査ではただの微差、ほんの運差で残らなかった方達もいて、私含めてみんな同じ土俵に立ってます。

それは単に同じ分野にいるっていう事じゃなく、私たちがダンスの何たるかを届ける先は土俵の外にも、外にこそあるということ。

一緒にズタコラ進みたい。

康本雅子（ダンサー、振付家）